

許真君伝考補遺

——『十二真君伝』を中心に——

秋 月 観 嘆

まえがき

さきに「許真君伝考——浄明道研究序説——」と題し、許真君すなわち許遜の関係伝承の歴史的な演変を透して近世道教の一派である浄明忠孝道の成立の大まかな経緯を窺見し、浄明忠孝道研究の初歩を印したが、⁽¹⁾その後数ヶ月を経て、漸くかつて浄明忠孝道に対する全体的な把握が未熟なために、鮮明な焦点を結ばなかった忠孝浄明道研究の幾つかの問題点を明瞭に捉ええたように思われるし、且つ研究の進むに伴って、自から前稿に幾つかの補正を必要とする部分のあることも明らかとなった。小論は専ら浄明忠孝道の祖師とされる許遜を中心として結ばれた十二人の師弟グループの記伝、所謂「十二真君伝」について検討を加え、許遜伝承の発展に関する若干の問題について前稿の遺欠を補完とするものである。

いわゆる十二真君を伝えられる如く晋代に実在した人物と見做すことには大きな疑問があるが、許遜を中心として最初に形成されたと伝えられるこの十二真君の伝承に関する考察は、今後の研究目標である許遜信仰発展の歴史的な沿革、許遜教団の社会的・宗教的な性格、延いては浄明忠孝道成立の教理史的な背景を考えるうえにも欠くことの出

来ぬ基礎的課題であることは言を俟たぬところであらう。

一

さて、ここに論じようとする所謂「十二真君伝」そのものは既に散逸しており、今日その原型を覽るをえないが、現行道藏中にはこれに基いて記述されたと見られる六點の十二真君記伝資料が遺っている。推定される成立の順序に従ってこれを列挙すれば

- (1) 仙苑編珠(卷下) 洞玄部記伝類 三三〇冊。
- (2) 逍遙山羣仙伝(修真十書玉隆集卷三五所収) 洞真部方法類 一二八冊。
- (3) 歷世真仙体道通鑑(卷二七) 洞真部記伝類 一四四冊。
- (4) 西山許真君八十五化録(卷下) 洞玄部譜錄類 二〇〇冊。
- (5) 許太史図伝(卷下) 洞真部靈図類 一九七冊。
- (6) 許真君仙伝 洞玄部譜錄類 二〇〇冊。

である。ところで、これらの資料の十二真君に関する記伝には記述の疎密は勿論、収録される諸真君の具体的な事迹のうえにも相当大きな差異が認められ、必ずしもこれらが直線的な継授関係において成立したものでなく、その間に系統を異にする藍本の存在を想定せしめるもののあることは、予め注意を払っておく必要があらう。⁽²⁾

次に聊か煩わしいが叙述の便宜上、予めここで十二真君記伝の内容を最も豊富な記事を載せる逍遙山羣仙伝に拠って、その要点を紹介しておく。

吳君 名は吳猛、字は世雲、濮陽(？山東省寧県)の人。吳に仕えて西安(江西省武寧県)の県令となり、四十才にして至人丁義の神方を与え、鮑靚の秘法をつぎ、その道術は吳晋の間に大に行われた。晋の武帝の時、その名声を聞いてこれに従った許遜に對し、悉くその秘要を授けた。

陳勳 字は孝季、蜀川（四川省）の人。博学の人であつたが出塵の志をもち、青城山（四川省灌縣）に入り谷元子を師として度世の法を求めた。そのご旌陽令たりし許君を慕つて門弟となり、その信頼を受け、専ら経籍を司り、藥鑪を管理した。

周広 字は惠常、廬陵（江西省吉安縣）の人。大將軍瑜の後であり、少くして天文音律の学に長じ、無為清淨の教に通じた。巴蜀の雲台山（四川省蒼溪縣）に遊び、漢天師の驅剪精邪の法をえて民の疾苦を救つたが、旌陽の真君のもとに参じ、弟子となつて近侍し、道法を遵行して始終怠ることがなかった。

曾季 字は興国、曾參の後といわれ、涇水（？山東省涇水縣）の人。少くして道士となり、三天法師の教を修め、また妙訣靈符をもつて病を療し、悉く治愈せしめた。そのご予章の豊城（江西省豊城縣）に隱居したが、真君の道誉を聞き、門下に投じてその巾凡に侍し、真君に重んぜられて神方の秘訣を授けられた。

時荷 字は道陽、鉅鹿（？河北省平郷縣）の人。少くして道德の教を修め、四明山（浙江省余姚縣）に入つて胎息衆妙の術を習ひ民の窮苦を濟つた。晋の惠帝から懷帝のころに真君の道法が江左に盛行するのを聞いて弟子となり、秘法を授けられて再び四明山に帰つて徒衆の教導に當つた。そのご西山に戻り真君の側近に侍した。

甘戰 字は伯武、豊城（江西省豊城縣）の人。孝行をもつて郷党に推されたが争乱に際して仕官せず、草沢にあつて神仙久視の術を喜んだ。真君が孝道の法を行い、害を除き物を利するを聞いて驅役に當らんことを請ひ、その材器を見込まれて弟子となることを許された。真君上昇の後に金丹の妙訣を授かり、豊城に還つて民に德惠を施した。

施岑 字は太玉、沛郡（？安徽省宿縣）の人。祖先の朔の際に呉に仕えて九江赤鳥縣（江西省瑞昌縣）に移つた。勇健多力にして弓劍にすぐれ、真君の大蛇征伐に参加して役者となり、甘戰と共に劍を執つて真君の左右に侍にした。

彭抗 字は武陽、蘭陵（山東省嶧縣）の人。孝廉に挙げられて晋に仕え、尚書左丞に累進、密かに仙業を修めたが、疾をもつて晋朝を辞し、真君に事え娘を真君に嫁がしめた。真君はその恪誠を認めて諸秘要を授けて朝廷に帰らしめたが、永和二年に予章に遊び、再び門下に詣で、朝夕道を聞いて精進した。

肝烈 字は道微、南昌（江西省南昌縣）の人。少くして父を失ひ母に仕えて孝をもつて聞えた。母は真君の長姉であり、真君はこの寡婦となつた姉の為に宅の西に室を築いて住まわしめた。母子はこゝに於いて真君の道妙を聞き、母は真君の家事を掌つて仙客の接待に當つた。

鍾離嘉 字は公陽、超本とも云う。南昌（江西省南昌縣）の人。真君の仲姉の子であり、少くして父母を失う。真君はその性格が簡淡であり、道を受ける資質のあることを見抜いて、これに神方を授けて拯救せしめ、且つ妙訣を付して役逐せしめた。真君昇

天の際には更に金丹を賜った。

黄仁寛 字は紫庭、建城（江城江西省高安県）の人。父の輔は孝廉に挙げられ、仕官して御史の地位に至った。紫庭は並はずれた器量・風采の持主であり、真君はこれに娘を与えた。のち真君の道を経て青州（山東省一帯）の地方官となったが、妻を郷里に留めて父母に侍せしめ、自らも仙道の靈力を備えて毎夜ひそかに父母の膝下に帰った。

これら十一人こそ孝道具許二真君伝（第十三紙）に「唯与十二仙君更相勉勵、内修不二之法神仙之術」と伝えられ、歴世真仙体道通鑑の許太史の伝（第十八紙）に「真君所從游者三百余人、其功行傑出通具君十有一人」と記される人々であり、優れた靈能・特技をもって初期許遜教団の發展に貢献した人々の事迹を記したものと見てよい。

二

さて前稿において、許遜伝承の基本文献である十一種の記伝について専ら内容的な検討を加え、各記伝の成立時期及び相互の繋絡関係の概要をまとめて表示したが、³⁾孝道具許二真君伝以下の諸記伝の系譜、並びに時代的な位置づけについては一応の結論に達したものの、内容的に見て最も原初的な伝承を残す雲笈七籤所収の許遜真人伝と太平広記所収の十二真君伝及び孝道具許二真君伝の関係については明確な結論をえぬまま最終的な結論を保留し、単なる憶測を述べるに止めておいたので、前稿において充分確かめえなかった十二真君伝そのものの来歴を探り、許遜伝承の成立について補足しておきたい。

既に紹介したように所謂十二真君は何れも許遜と直接の師弟関係にあった人々であり、註(2)に掲げた如く、彼等の飛昇を最も遅い時期にかけている資料によっても、寧康二年(三七四)より永初二年(四二二)迄の間に十二人の飛昇を終了している。従って飛昇の事柄は兎角、若し彼等が伝えられる如く晋代に実在したとするならば、彼等十二真君の事迹は少くとも六朝後期までの文献に何等かの形迹を現わしてよいとも考えられるが、唐代以前の文献に關係伝承

を全く見出しえないのは、彼等が晋代に実在したとする記述が頗る信頼し難いことを物語ると共に、十二真君の伝承そのものの発生もまた左程古いものでないことを暗示するものがある。事実、十二真君伝に拠ることを明記する十二真君の記伝は五代末のものと推定される仙苑編珠が最初である。⁽⁴⁾即ち同書(卷下)に簡単ながら記伝が載っており、「十二真君伝、許君名遜、字敬之、為旌陽果令、師誨母受孝道明王法、与吳君於陵洞斬蛟蜃、以晋永康二年八月十五日、四十二人拔宅昇天」に始まり、「鐘君名嘉、字超本、許君仲妹(姉?)之子、少孤得仙舅之要、許君上昇後、以十月十五日日中、乘碧霞之輦而昇、宅為丹陵觀、十二真君事盡于此」をもって終っている。このほか十二真君伝に拠ることを明記する関係資料には北宋初の太平広記、南宋のものと推定される前掲の西山許真君八十五化録があり、五代より宋末にかけて十二真君伝の伝本が存在したことは確実であるといえる。ともあれ、これによって十二真君伝成立の確実な下限を一応、五代(九〇七―九五九)の時代に据えることが出来る訳であるが、果してこの下限を何処まで溯らせうるか、許遜伝承及び十二真君伝承の中で、常に重要な役割を担って登場する呉猛の記伝を手がかりとして考察を進めてみよう。

まず最初に検討すべき資料は、既に前稿に全文を引用した晋書(卷九五)芸術伝に載る呉猛伝であるが、云う迄もなく現行晋書(百三十卷)は貞観十八年(六四四)上進の所謂御撰晋書であり、記述内容をそのまま晋代の伝承と見ることは若干の危険がない訳ではないが、何れにしても許遜は勿論、十二真君の伝承についても何等触れるところがない。これに次いで古い記伝と見做しうるものは太平広記(卷四五六)が「出予章記」として収録する次の如き呉猛伝である。

永嘉末、予章有大蛇長十余丈、断道經過者蛇輒吸取之、吞噬已百数、道士呉猛与弟子殺蛇、猛曰此是蜀精、蛇死而蜀賊当平、既而杜弢滅也、

予章記は今日散逸しているが、隋書(卷二三)の経籍志に収録される「予章記一卷雷次宗撰」、及び唐書(卷五七)の芸文志に収録される「雷次宗予章記一卷」をこれに引き当ててよいであろう。宋書(卷九三)及び南史(卷七五)の伝によれば、雷次宗は予章の人であり、少くして廬山に入つて慧遠に師事、隱退して徵辟を辞していたが、宋の元嘉十五年(四三八)に至つて徵辟に応じ、二十五年(四四八)六十三才で卒している。従つて予章記は当然彼の生卒年代である三八五年より四四八年まで、即ち五世紀前半の撰述と考えてよく、これを呉猛伝の拠るべき最古の資料と見做すことが出来よう。然し前掲の如く、これに許遜の名は未だ現れず、後に許遜の事迹として次第に説話化されてゆく蛟蛇征伐の事迹はすべて呉猛の事迹とされたままであり、僅かに「道士呉猛与弟子殺蛇」の記事が後に許遜伝承に結びついて發展する端緒となるものとして注目されるのみである。ところで、類聚の性格をもつ太平広記は同一人物の異伝の重複を厭わず諸類例のもとに収載しており、唐の李德裕の如きは実に九例に及んでいる。⁽⁵⁾試みに関係人物の事例をとつて見ても許遜は卷十四神仙と卷二三一器玩。呉猛は同じく卷十四と卷四五六蛇。また浄明道の経師とされる洪崖先生伝の撰者である張説は卷一九八文章・卷二三五交友と卷二四〇譚伴の類例に重ねて収載されている。⁽⁶⁾かかる太平広記の収載態度から推して、万一予章記に許遜関係の記事があれば、異色ある彼の記伝は恐らく呉猛と並んで何れかの類例に収録されて然るべく思われるが、現に予章記を引く許遜関係記伝が全く見当らないのは、恐らくそれが余章記に載っていないかったことを暗示するもののように思われる。

この予章記について古い資料は初唐の道士王懸河の撰である三洞珠囊(卷一)の道学伝に拠る呉猛伝である。即ち道学伝第四云、屬大疫癘、競造呉猛乞水、猛患其煩、乃纂江水方百步随意取之、病者得水皆愈也、

この呉猛の行迹はやがて旌陽許真君伝に至つて許遜の靈異として許遜伝中に撰取されるものであるが、ここにも許遜の名の現れる形跡は認められない。元来、道学伝は陳の馬枢撰であり、現在これまた散逸しているけれども、古道書

に引用するものが多く、主として南朝系道士の伝を収集したものと⁽⁷⁾して頗る注意すべき書物であるが、例の仙苑編珠(巻中)には許遜の再從昆弟とも族子とも云われる許遜の專伝⁽⁸⁾をこの道学伝を引いて載せているにもかかわらず、許遜については単に十二真君伝に拠つて前掲の如き簡単な記事を載せるに止まっているのは許遜伝が道学伝に収載されておらなかったことを物語るもののようで、このことは道学伝の撰述される六朝末の時代において、洪州西山の遺蹟における初期の許遜に対する祠庙信仰の存在まで否定するものではないにしても、少くとも許遜は道学伝に収載に値する権威ある神仙——即ち吳猛を弟子となし、十二真君を統率する許真君——としての地位と名声とを確立するに至らなかったことを示すものと受取ることが出来るように思われる。恰もこの様な憶測を裏書きするかのよう⁽⁹⁾に、道学伝二十卷・神仙伝十卷・集仙伝十卷をはじめ、仙人許遊伝一卷・仙人馬君陰君内伝一卷など多数の仙伝を連載する隋書(巻二二)経籍志中に許遜関係資料は全く存在せず、唐書芸文志に至つて初めて「道士胡慧超神仙内伝一卷、晋洪州西山十二真君内伝一卷、(中略)道士胡法(慧)超許遜修行伝一卷、張説洪崖先生伝一卷、張竄先生唐初人、冲虚子胡慧超伝一卷、失名慧超高宗時道士」等の許遜、並びに許遜教団関係伝を見出すことが出来るばかりでなく、唐代撰述の諸文献の中に許遜及びこれを中心とする十二真君関係の具体的な記述が俄にその数を増す。

まず太平広記(巻三三二)に「朝野僉載」に拠る許遜関係資料があり

西晋末、有旌陽県令許遜者、得道于予章西山、江中有蛟蜃為患、旌陽没水、拔劍斬之、後不知所在、頃漁人網得一石、甚鳴、擊之聲聞数十里、唐朝趙王為洪州刺史、破之得劍一雙、視其銘、一有許旌陽字、一有万仞字、一有万仞師出焉、

かつて吳猛の事迹として語り継がれてきた旌陽の地における蛟蜃征伐のことが旌陽県令となつてのち西山に道をえた許遜の事迹として記されている。朝野僉載二十卷(現行本六卷)は四庫全書総目提要(卷一四〇)の解説によれば則天武

後のころ文名の高かった張鷟の撰としているが、撰者の当否はともかく、その成書年代はこれより若干降るらしく、太平広記(卷二四四)に同じく朝野僉載に拠る開元の進士「蕭穎士」の記事があり、旧唐書(卷一九〇)によれば彼が進士となったのは開元二十三年(七三五)であることからしても朝野僉載の成書年代は開元末ころまで降ることは確実となり、呉猛の靈異を抱撰する許遜伝承出現の下限は一応八世紀中葉ころと見なければならぬ。併し唐朝の趙王とは太宗の十三子に当る趙王福のことであり、彼が貞觀十三年(六三九)に受封し、咸亨元年(六七〇)に薨じている事実(旧唐書卷七六)は許遜伝承の成立の下限が更に溯る可能性のあることを示唆するものと云えよう。ところで既に触れた如く、唐書芸文志に「胡慧超神仙内伝」、胡慧超の訛誤と見られる「胡法超許遜修行内伝」、更には「冲虚子胡慧超伝」が収録されていることは、許遜伝承の形成のうえに胡惠超なる人物が極めて重要な役割を果していることを明示するものであるが、前稿において論じたように胡慧超とは孝道呉許二真君伝、及び歴世真仙体道通鑑の許太史の伝に、唐の高宗の永淳(六八二)中、西山において許遜を祖師とする所謂「孝道」の教を再興し、その觀字を重興したと伝えられる人であり、且つ許遜教団の教説―孝道―の発展の沿革のうえから見ても「△再興▽」と云い「△重興▽」と云うこの永淳中の記事は許遜の祠廟を中心として伝承された單純な神仙信仰が、前述の如き孝子呉猛を介する孝道譚を加えて増飾され、倫理的な性格を備える新たな教説―孝道之妙法―として再編成された事実を暗示するもののようで、胡慧超こそ其の推進者であった」ものと推測しうることからしても、唐志に許遜修行伝の撰者とする胡法超は胡慧超の誤と見てよく、所謂許遜伝承は唐の高宗の時代、即ち七世紀中葉ころ胡慧超の手によって纏められたものと推定することが出来るであらう。

更に十二真君伝については太平広記(卷二八〇)に「撫言」に拠る施肩吾の伝があり⁽¹⁰⁾

施肩吾元和十年及第、以洪州之西山、乃十二真君羽化之地、靈跡具存、慕其真風、高蹈於此、嘗賦間居遺興七言詩

一百韻、大行於世、

の如く、洪州の西山をもつて十二真君飛昇の靈蹟とする十二真君伝承成立の明証を見出しうる。施肩吾は從來云われているように五代の人ではなく、歴世真仙体道通鑑(卷四五)の伝には唐の憲宗の元和十五年(八二〇)の進士とされており、唐書芸文志も「施肩吾辨疑論一卷」を収録し、これに「陸州人、元和進士第、隱洪州西山」と注していることを信頼すれば、彼は唐代後期の人でなければならず、十二真君飛昇の伝承が如何に遅く見ても九世紀の初期以前に成立していたことを窺いうる。加えるに太平広記(卷三三三)には「玉堂閒話」に拠る真陽觀の記事を載せ

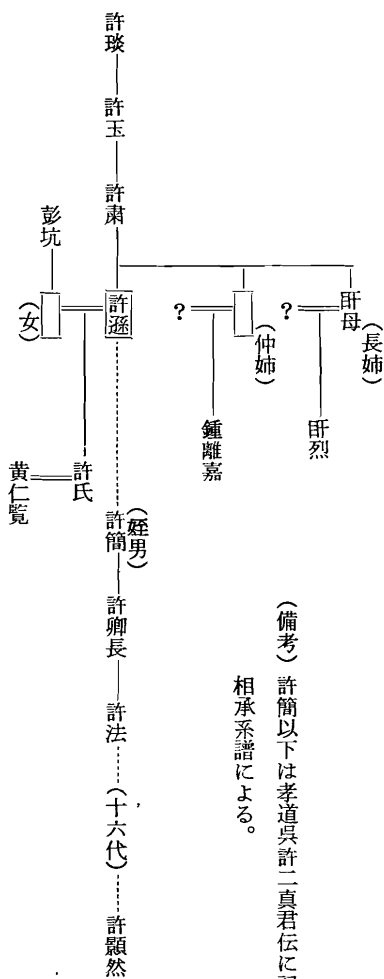
新浙果有真陽觀者、即許真君弟子曾真人得道之所、其常住有莊田、頗為邑民侵拠、唐僖宗朝、南平王鍾伝、江西八州之地、(中略)即以其田還觀、(中略)至今猶在本觀、而不能復蜚矣、

と記しているのは許遜の弟子の一人である曾亨の旧宅を真陽觀に配する伝承の存在を事実をもつてに証明し、十二真君各個にまつわる具体的な伝承がこれに先じて成立していたことを裏付けるものがある⁽¹¹⁾。ところで、唐末の道士杜光庭の集撰にかかる壩城集仙録(卷六)の肝母の伝に⁽¹²⁾

肝母者予章人也、外混世俗、内修真要耳、嘗云我千年之前曾居西山、世累稍息、當歸真中、其子名烈、字道微、少喪其父、事母以孝聞、(中略)唯肝君純篤忠厚、許君委用之、即与母結茅於許君宅東北八十余步、且夕侍養許君、謹願恭肅未有意、母常於山側採擷花果、以奉許君、君惜其志誠、常欲拯而度之、

と記し、十二真君の一人である肝烈と肝母の親子關係及び西山における両者と許遜の師弟關係を明記しているが、さきに紹介した逍遙山羣仙伝に「烈字道微、少孤事母以孝聞、母蓋真君之姉也、真君凡二姉、肝母為之孟」という肝母を許遜の長姉とする繫縁關係はまだ現れていない。ちなみに、逍遙山羣仙伝に「皆以懿戚久処師門」と題して明記する彭坑・肝烈・鍾離嘉・黄仁覽と許遜の繫縁關係は

(備考) 許簡以下は孝道具許十二真君伝に記す許遜信仰の
相承系譜による。



この様になるが、所謂十二真君伝に拠る最初の記伝である仙苑編珠も肝母の繋縁について何等記すところがないことから推して、唐末から五代にかけて十二真君伝承は細部に亘って具体的な筋書を整えたもの、未だ必ずしも定着せず部分的な改訂・増飾を被り、更に逍遙山羣仙伝の成立する十三世紀の初期に至る間にも若干の発展を遂げたことが察知される。而してその間、この伝承を纏めて後世の十二真君記伝の定型を完成したのが次に述べる余汴の十二真君伝であったのであろう。

三

既に指摘した如く、晋洪州西山十二真君内伝一卷が唐書芸文志に収録されており、これによって唐代における十二真君伝の存在を確認しえたが、宋史(卷二〇五)芸文志にはこの内伝は見えず、「余汴十二真君伝二卷」が新たに収録されている。この両伝は書名・巻数のうえから当然別本と考ねばならないが、宋史所録十二真君伝の撰者と見られる

余汴については宋史(卷三三五)の余良肱伝に附伝があり、これによれば余汴は洪州分寧県(江西省修水県)の人である。余良肱の子であり、子任の恩をもって校書郎に試せられて官吏となるが「紹聖初治、棄渠陽罪免婦、徽宗即位、復奉議郎管勾玉隆觀、未幾復渠為靖州、又論前事免終於家」と記述されているように、父良肱の行政上の失策の責任を負って不遇な官途を歩み、その生涯を終るが、徽宗即位ののち玉隆觀を管勾したことがあり、また父である良肱も「遷光祿卿知宜州、治為江東最、請老提舉洪州玉隆觀、卒八十一」と云われ、晩年に同じ洪州の玉隆觀の提舉となつてその地に卒していることが知られる。ところでこの玉隆觀とは許遜の修道の地であり、許遜信仰発生の地でもある江西省予章道新建県の西山(別名、厭原山・南昌山・逍遙山)に在り、許遜飛昇の直後に建立された游帷觀に起源し、宋の真宗より玉隆の賜額を受けて玉隆觀と改められたものであり、許遜教団の根本道場であると共に浄明忠孝道の本山とされる由緒ある道觀である。⁽¹³⁾余父子が二代に亘つて洪州西山の玉隆觀と斯くの如き關係を保つた以上、余父子がこの地において修道し、飛昇したと伝えられる十二真君について関心を持つことは当然であらうし、十二真君伝撰述の機会にも充分恵まれていたと考えてよく、宋志に録する余汴十二真君伝二卷の撰者をこの余汴に比定し、余汴が晋洪州西山十二真君内伝に増補・改訂を加えたものが本書であると見做してもよいであらう。⁽¹⁴⁾本稿の冒頭において、現存の十二真君記伝諸資料が必ずしも同一藍本の直線的な継授關係において成立したものとは考え難い節のある点を注意しておいたが、以上の考察に大過なしとするならば、前掲六点の資料中、註(2)の比較において独自の記載を含むものとして指摘した仙苑編珠所引の十二真君伝、並びに太平広記所引の十二真君伝は唐志所録の晋洪州西山十二真君内伝に比擬すべきものであり、北宋末以後の成立にかかるその他の五資料を余汴十二真君伝の系統に連るものと推定して大過ないものと思われる。なお十二真君伝についてはこのほか論すべき問題点は少くないが、与えられた紙数も既に尽きたので一応ここで擱筆し、残された問題は次稿に譲ることとしたい。

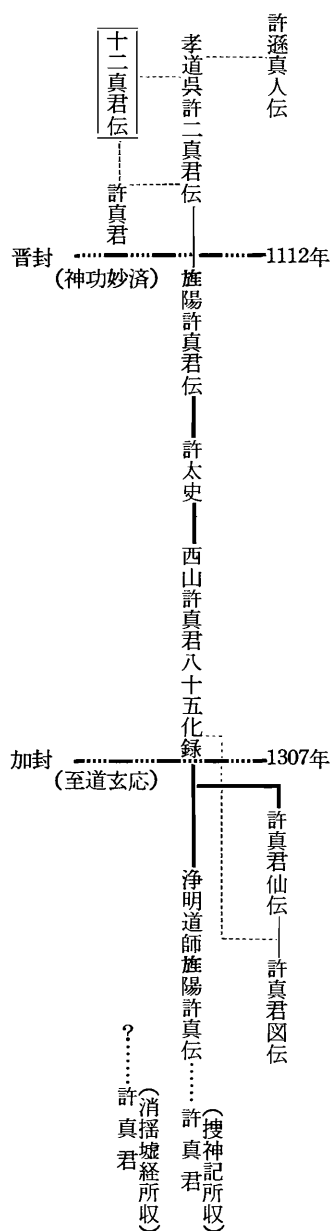
おわりに

叙上、幾多の憶測を重ねながら進めてきた考察によって、兎も角、唐初七世紀中葉ころにおける許遜伝承の成立に次いで、遅くとも九世紀初期までに十二真君に関する伝承の大筋が形成されている事実が明らかとなったが、この結論は、前稿において十二真君伝の来歴が不詳のため、九世紀中頃の成立と推定される孝道吳許二真君伝との成立関係について明快な結論を下すことが出来ぬまま「両伝(十二真君伝と孝道吳許二真君伝)の成立の前後関係は今のところ断定を下すべき資料に乏しいが、記述される許真君・伝承の内容的な考察による限り、許遜真人伝の伝承が現存資料中最も原初的な形態であり、許真君の吳猛に対する相対的な地位の高まる十二真君伝、更に許真君の孝道における独尊的な地位が確定する孝道吳許二真君伝へと次第していることが推定出来る」と述べた前稿の見通しと錯誤するところはなく、本稿において専ら辿ってきた十二真君伝の成立史的考察の結果は、前稿における許遜伝承の発展史的考察の結果をそのまま裏附けるものがあると云うことが出来る⁽¹⁶⁾。

註

- (1) 集刊東洋学 第十五輯(昭和四十一年五月二十発行)収載。
 (2) 試みに、これらの諸資料に記載する十二真君の名称・序列・飛昇時期について比較対照するならば

許遜	十二真君名	飛昇年月日	仙苑編珠
	永康二年八月十五日		
許遜	十二真君名	飛昇年月日	西山許真君八十五化録 歷世真仙体道通鑑 逍遙山羣仙伝
	寧康二年八月十五日		
許遜	十二真君名	飛昇年月日	許真君仙伝 許太史真君図伝
	飛昇年月日		



(3) 参考のため再録しておく。

この様な差異があり、まず真君名について共通する(2)(3)(4)(5)(6)と(1)の間に、また飛昇時期については二三不詳なものもあるが同じく(1)と(2)(3)(4)(5)(6)との間に判然とした相違が認められる。更に真君掲載の順序について見ても、(1)を除く五本の中において(2)(3)(4)と(5)(6)の間に若干の喰い違いが認められるものゝ、(1)との間に存する程の大きな出入はなく、総合して見ても(1)と(2)(3)(4)(5)(6)との間に明瞭に一線を画する断絶が存しており、系統を異にする伝本の存在したことを憶測せしめるものがある。

鍾嘉	黄輔	彭坑	施峯	旌烈	曾亨	陳勲	周広	甘戦	吳猛	時荷
永康二年十月十五日	？	永和二年八月十五日	？	同右	同右	永康二年八月十五日	？	天建元年一月七日	永嘉三年九月十五日	同右

黄仁覽	鍾離嘉	旌烈	彭坑	施岑	曾戰	時荷	周広	陳勲	吳猛
同右	寧康二年十月十五日	寧康二年八月十五日	永初二年八月二十四日	寧康二年十月二十八日	大建元年一月七(十)日	同右	同右	同右	寧康二年八月十五日

鍾離嘉	黄仁覽	旌烈	陳勲	曾亨	施岑	周戦	甘広	時荷	彭坑	吳猛
-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

飛昇期日は上欄の三本に同じ

なお前稿では一一二一年を一一一七年とし、その線を旌陽許真君伝と許太史の間に引いたのは誤植であり、訂正しておく。

- (4) 陳国符氏「道藏源流考」(二四〇頁)は仙苑編珠の成立年代は不明なるも著者の王松年は「五代或宋人」となし、福井康順博士「道教の基礎的研究」(六八頁)はこれを「後唐もらしい」と推定しているが、その自序に「又尋(中略)八真伝十二真君伝、近自唐梁以降、接於聞見者得一百三十二人」と記しており、収録する最近人の記事は開平三年(九〇九)が最後となっていることから、一応、五代の成立と見ておく。

- (5) その九例とは九八卷異僧、一四三卷微応、一五六卷定数、一七二卷精察、一七〇卷知人、二〇一卷才名、二四四卷編急、三九九卷水、四〇五卷宝の類例であるが、このほかにも或は見落したものもあるかも知れぬ。

- (6) 旧唐書(卷九七)新唐書(卷一二五)に張説の伝があり、彼は開元十八年に六十四才で没しており、玄宗より「嗚呼積善之墓」の碑額及び神道碑文を賜っている。また玄品録(洞神部譜錄類所収)卷五の道術の項に中書令張説が玄宗の命を受けて王希夷に会い道義を訪うたことが見えている。なお宋史(卷四七〇)にも同名人物の伝があり、孝宗(一一六三—一一八九)の本紀には玉隆觀の提挙となつたことが見えているが、この場合前者を当てるべきことは唐書の上進年代(一〇六〇)から推して当然であろう。

- (7) 陳国符氏「道藏源流考」二三九頁参照。

- (8) 前掲拙稿(第八頁)を参照されたい。

- (9) 四庫提要が朝野僉載の撰者としている張鷟の名が朝野僉載に拠る太平広記(卷二五四・二五五)の引文中に再度に亘って見出されることは奇妙であり、撰者について再考の余地があるように思われる。

- (10) 四庫提要(卷一四〇)の「唐撫言」の解説によれば、この書には五代の王定保撰のものほかに南唐の何晦撰の同名書があったらしいが、本文に引用せる施肩吾の記事は太平広記の貢挙の類例に載るものであり、その内容から推しても、唐一代の制挙の事を記したものと云われる前者より引用したものと考えてよいであろう。なお王定保撰の唐撫言は後周の顯徳元年(九五四)に後間もなく撰述されたものと云うが、本書の撰述年代は施肩吾が後述の如く元和の道士であることが明らかである以上、こゝで取り立てて問題にするには及ぶまい。

- (11) 玉堂閒話の撰者は不詳ながら、太平広記の編纂が宋初の太平興國三年(九七八)であることから推して、五代末以前の書と見ることには異論はあるまい。

- (12) 道藏 洞神部譜錄類 五六一冊。

- (13) 西山許真君八十五化録 洞玄部譜錄類 二〇〇冊。浄明道師旌陽許真君伝（浄明忠孝全書 卷一所収）太平部 七五七冊。
- (14) 小野四平氏「内閣文庫許仙鉄樹記について」（集刊東洋学 第十五輯所収）の注(5)に、宋史（卷三三三）の余氏が余汴十二真君伝の著者である可能性がある旨を付記している点に示唆をえた。記して謝意を表しておく。
- (15) なお許真君伝については、本稿の成立史的な観点から明確にこれを位置づける余裕に乏しく、前稿における許遜伝承の発展史的な考察の結果——内容的に見る限り本伝を所謂許遜伝承の最も原初的な記述と見做しうる——を本稿において確認することが出来なかったが、いずれ後考に俟ちたい。

昭和四十一年九月廿八日 稿了。

付記 本稿は文部省科学研究費交附金による研究成果の一部である。